

令和2年度 京都府立西舞鶴高等学校 学校経営計画（スクールマネジメントプラン）（全日制）（実施段階）

学校経営方針（中期経営目標）	前年度の成果と課題	本年度学校経営の重点（短期経営目標）
(1) 希望進路を実現できる学力の充実・向上の実現	(1) 「総合的な探究の時間」では生徒の主体性やSDGsの視点で提言できる力を育てる実践を行いある程度の成果が見られた。また、公開授業や授業アンケートを実施し授業改善に活用した。今後は、主体的で探究的な活動をさらに充実させるために、教員の教育力を高め、実践して行くことが大切である。	○普通科と理数探究科がそれぞれの特色化を一層推進し、西高ならではの魅力ある学校づくりに努める。 ○生徒が主体性を発揮して自己有用感に裏付けされた自尊感情を育む場面を増やし、探究活動を中心にアクティブラーニングを取り入れた主体的、対話的で深い学びを推進し、質の高い学力を育む。 ○ICT等の活用を進め、「わかった」「できた」という感動を大切に、さらなる高みへと導く学習指導・キャリア教育を行い、希望進路の実現につなげる。 ○文武両道の校風と挨拶をする文化を大切に、チーム西高としてつながる力を高め切磋琢磨する教育環境づくりを進める。 ○命と健康、そして人権を尊重する態度を育てるとともに、交通ルールやSNSのマナーについての意識を高める教育を推進する。 ○「地域に開かれた学校づくり」を充実していくために、生徒の活躍する姿を広く発信して積極的な学校広報を行う。
(2) 規範意識や人権尊重の理念の更なる徹底と生徒の人間力の伸長の実現	(2) 3年生については、組織的な指導体制の整備を図ることで進路希望に応じた丁寧な指導を進めることができた。今後は、高大接続・入試改革を見据えて教員個々の指導力向上を図り、1年次から学力を定着させ、ガイダンス機能を充実させることが必要である。	○命と健康、そして人権を尊重する態度を育てるとともに、交通ルールやSNSのマナーについての意識を高める教育を推進する。
(3) 保護者・地域住民の信頼を高める学校づくりの推進	(3) 部活動では、地道に努力する生徒と献身的な教職員の支援により、積極的な活動が行われ、全国大会や近畿大会・地区大会での活躍が見られた。今後も、学業と部活動が両立できるよう条件整備を一層進めることが必要である。 また、社会性等を身につけるために学校行事などの特別活動においても積極的な活動を行うとともに、成人年齢の引き下げに伴い、さらなる主権者教育の充実が望まれる。 (4) 生徒が安心して学校生活を送れ、部活動や諸行事にも積極的に取り組む学校として評価を得ている。一方、挨拶の励行、ボランティア活動の活性化、マナー向上、人権意識の向上、学校生活になじめない生徒の手立てやいじめ・体罰等の予防対策には引き続き重点的に取り組む必要がある。 (5) 地域社会に貢献し、その期待に応える学校づくりを進めている。今後、見やすいホームページづくりや学校便りなどを通して、中学生や地域の方に本校生徒の活躍がよくわかるよう情報発信を行い、さらに「地域に開かれた学校づくり」を充実していく必要がある。	○信頼される学校づくりに向けて保護者連携を進めるとともに、教職員の同僚性を高めて指導力向上を図るOJTを推進する。

評価領域	項目（重点目標）	具体的方策	評価	成果と課題	
国語科	学習指導	基礎学力の定着に向けての支援	漢字、古典文法、漢文句法、古文単語、現代文単語等、基本的な知識について、小テストを通して定着を図る。	A	【成果】 ・年度当初の重要な時期に臨時休業期間があったりしたが、古典文法等、何とか今後につなげていくための基礎力を養成することができた。 ・オンラインでの添削指導や課題提示など、新しい時代に即した指導法の試みを、各学年で実施した。 【課題】 ・直接的な対面による言葉のやりとりなど、従来から言語表現の上で欠かせない部分が、コロナ禍の元でなかなか実施できないことがあった。 ・小説教材など、今後の変化を見据えての新しい扱い方にまだまだ課題が残ってしまった。論理的文章と文学的文章の配分、伝統的な古典教材と今日的な現代日本語教材の連携など。
		思考ツールとしての国語力養成の支援	新しい時代に即した、情緒的に流されない論理的理解を目指す。	A	
		進路希望の実現に向けての支援	古典分野を疎かにすることなく、正確な読解能力を養う。 客観的文章の読解とともに、自ら情報を発信する際の能力を向上させる。	B C	
	授業改善	共通テストへの対応	従来からの出題形式に対応するとともに、新傾向問題への対応を進める。	B	
		総合的な学習の時間との連携	聴衆に届くような、洗練された言語表現ができるようにする。	B	
	地歴・公民科	学習指導	生徒の進路希望の実現	単元ごとの小テストを実施し、個に応じたきめ細かな学力の定着を実現する。 模擬試験や大学入試などの過去問演習を計画的に実施し、各種試験で生徒が自信を持つことができるような結果を残すための実力をつける。 進路希望に応じ、生徒が主体的に取り組むことができる学習課題を提供する。	
評価の改善			定期考査の質の向上	評価の信頼性・妥当性を向上させるため、定期考査で問う内容を精査する。 定期考査の結果の分析を通し、日々の教科指導の継続的な改善につなげる。	B C
			教師のスキルアップ	教科指導力のさらなる向上	公開授業と研究協議の実施、教科研究会や予備校の実施する研修への自主的な参加を通じて、教科指導力を向上させる。 共有サーバー内の情報を整理し、教科全体での教材共有を進めることで、生徒にとってよりわかりやすい教材の開発につなげる。 生徒の「思考力・判断力・表現力」を育む授業、主体的に学習に取り組む態度を養う授業を実現するための、魅力的な授業デザインを研究する。

数 学 科	学習指導	基礎学力の定着	主体的・対話的で深い学びを実現するために、アクティブラーニングを推進し、質の高い感動のある授業を展開する。	B	A	A	【成果】 ・臨時休業期間や長期休業中には、オンラインで生徒の質問に回答できるようにし、疑問を残さないようにすることで、基礎学力を定着させることができた。 ・基礎・基本を疎かにしない授業展開を心掛けるとともに、教科書傍用問題集を活用し課題を与えることで、家庭学習習慣の定着を図ることができた。 ・大学入学共通テストでは、数学ⅠA、ⅡBともに本校受験者の平均が全国平均を上回り、知識を活用する能力の養成に一定の成果が見られた。 ・一昨年、昨年に引き続き1年普通科では試験を統一し、改善を図る中で新たな課題を発見することができた。今後も評価のあり方を研究していきたい。 【課題】 ・新型コロナウイルス感染症関連での制限もあり、アクティブラーニング型授業の実施はなかなか進まなかった。 ・難関大学受験者が例年より少なく、入学時から課題であった高度な学力養成は達成できなかった。課題研究や普通の授業の中で、生徒個々の興味・関心を深化させる取組の実施には課題が残る。 ・ICT活用については、グラフの表示や演習問題の解答を投影するなど限定的な使用であったが、教室に設置されたプロジェクタを活用することができた。今後も教育効果向上のさらなる工夫を行っていきたい。		
			基礎・基本を徹底することで、教科書の内容をしっかりと理解・定着させ、活用力の育成を図る。また、傍用問題集の活用や週末課題等による授業と連携した家庭学習の習慣化に努める。	A					
			居眠り・私語の防止、制服を正しく着用させるなど授業規律を確立し、学習効果を向上させる。	A					
		希望進路実現へ向けた学力の充実	各学科・コースにおける学力実態を考慮し、それぞれに応じた指導事項の精選を行うことで学力の伸長を図る。	A					
			大学入学共通テスト導入をはじめとする大学入試改革を見据え、基本的な知識・技能を活用し深く考える必要がある課題を与えるとともに、文理融合の教科横断的な取組を実施し、思考力・判断力・表現力を養成する。	A					
			週末課題や進学課外において、大学入試問題や模擬試験などを活用し、難関大学受験に対応できる学力の充実に努める。	B					
	指導力向上	OJT推進による教科指導力の向上	公開授業等を活用し分かりやすく関心・意欲が高まる授業や、基礎学力の定着および発展的学力充実のための指導法についての教科内研修を行う。	B					
			生徒の深い学びを援助するためのICT活用指導力、自律的な問題解決を促せるようなファシリテーション能力の充実に努める。	B					
			各学科・コースの生徒に対する指導法および評価のあり方をより良いものとなるよう研究を推進する。	A					
理 科	学習指導	基礎学力の定着	各単元のねらいを明確にし、学科・コースに応じた指導内容の精選及び重点化を図る。	A	A	A	【成果】 ・教員同士が、学科やコースごとに学習到達度を考えながら、重点的に教える内容を吟味し、授業進度も連絡を取り合いながら進めていくことができた。また、タブレット端末を用いて授業を展開したり、ディスプレイに視覚教材を投影しながら授業を進めることで、生徒の理解を深められた。 【課題】 ・生徒の学力レベルに合った教材や演習問題の研究など、個別最適な学びに向けた教材研究を継続して行っていく必要がある。		
			実験レポートや課題等の提出物を確実に提出させる。	B					
		教材研究	観察や実験を通して、自ら学ぶ楽しさや喜びを体験することができる学習活動を考える。また、ICTの有効活用を図る。	A					
		希望進路実現に向けた学力の充実	授業進度や授業内容に偏りが生じないように、担当者間で連携を密にする。また、問題演習方法を工夫し、考える力の育成・定着を目指す。	A					
	探究活動の推進	探究的態度の育成	民間・公的機関研究所、および大学との連携を通じて自然科学に対する興味・関心を高める。	A					
		課題発見力の育成	与えられた問いや答えのある問いに取り組むのではなく、社会や学術の世界における課題を発見し取り組む力を身につけさせる。	A					
		評価方法の研究	ポートフォリオやルーブリックを参考にした評価方法を研究する。	B					
	OJTの推進	新課程入試の研究	新課程入試の出題傾向やセンター試験廃止後の大学入学共通テストに関する情報収集に努めるとともに、教科会で情報共有し、教科指導力の向上を図る。	B				B	【成果】 ・新課程入試の研修会の資料を教科内で回覧・伝達し、情報共有に努めた。 【課題】 ・継続して入試改革に関する情報収集が必要である。

保健 体育科	体育	運動能力、体力の向上	各種目の特性を生かして、総合的に体力・技能が向上するように指導する。また、生徒の成功体験を褒め、自己肯定感を感じられるように指導する。	B	B	【成果】 ・若手の教員が多い中、教科内での連携を取り、柔軟に対応することができた。今年度は特に、新型コロナウイルス感染症予防対策を保健部や担任と連絡調整を行うことができた。緊急事態宣言中には、選択種目・実施内容を変更するなど素早く対応することができた。 【課題】 ・例年年度当初に行う集団行動を十分に行うことができず、学校行事だけでなく、授業の開始、終了時のけじめをつけることができなかった。		
		主体的、積極的な行動力の育成	選択種目を多く取り入れ、生徒自ら進んで運動に取り組む力を育成し、工夫して活動し技能を習得できるよう指導する。	B				
		社会性、協調性の育成	集団行動指導を積極的に実施し、集団の一員である自覚と効率的な活動に対する意識を向上させる。学習の意味を理解させ、共に技能を向上させることができるよう、協働作業を充実させる。	C				
	保健	健康で安全な生活を送る資質や能力の育成	自ら課題を見つけ解決に向けての方策を見出すことのできる力をつけさせる。	A			A	【成果】 ・保健授業において、多くの教員がICTを活用しながら効果的に授業を進めることができた。また、生徒の課題発表においても多くの生徒がパワーポイントを作成するなどICTを活用し、発表することができたことは今年度の成果である。
		情報の収集と表現する力の育成	課題学習を通して、課題解決のために情報を収集し、発表できる力を身につけさせる。	A				
	体育的行事	体育的行事への積極的参加の意識向上	安全かつ効率性を考慮して計画を進め、柔軟な対応、迅速な判断をする。	B			B	
教員の資質向上	積極的な意識向上	積極的に自己研鑽を行い、他の先生の指導を参考にするなど指導力向上のために行動・実践する。	B	B				
芸術科	学習指導	主体的、対話的に取り組む姿勢の育成	各題材における指導内容を明確化し、指導事項を活用させながら表現・創作活動に取り組ませる。自立的な課題設定を促す。	A	B	【成果】 ・身近な題材をテーマにする等、生徒の学習意欲を引き出す課題設定を意識できた。毎時間の指導内容を明確にすることで、生徒自身が授業の見通しを持つことができた。 【課題】 ・今年度は、西高EXPOの延期により授業作品を展示することができなかったが、来年度は、校外に限らず校内での作品展示を行うなど、作品の発表機会を充実させられるよう教科間で連携していきたい。 【成果】 ・感染対策を行いながらも、充実した表現活動や鑑賞活動ができるよう題材を工夫し、教科間で連携しながら授業研究に取り組むことができた。諸外国の芸術にも触れる機会を増やすことができた。 【課題】 ・個別の課題については充実させることができたが、生徒同士の協働的な表現・鑑賞活動については、感染拡大防止の為、制限される活動が多く、生徒同士で関わりながら学ぶ場面が減少した。今後は感染対策を講じながらも、ICT機器も活用しながら、生徒同士の作品を鑑賞したり、相互的なコミュニケーションがとれる授業づくりを目指したい。 【成果】 ・生徒用iPadを用いての創作活動や、モニターを用いての生徒の作品の共有など、多くの場面でICTを効果的に活用することができた。令和4年度の観点別評価の実施に向け、教科内で評価方法を共有し、意見交流を行った。 【課題】 ・観点別評価に対応できる評価規準作成に向けて、令和3年度より各科目の具体的な評価規準作成を進めていきたい。		
			校外外の文化的発表の場を積極的に利用して、芸術選択生徒の主体的な制作・表現活動につなげる。	C				
		芸術における見方・考え方を働かせ、生活や社会の中の芸術や芸術文化と豊かに関わる資質・能力の育成	幅広い活動（音・美・書）を通して、創造的な表現を工夫したり、芸術のよさや美しさを深く味わわせるために、学習内容を明確にした鑑賞活動を充実させる。	A			A	
			幅広い活動（音・美・書）を通して、各科目の特質について理解させ、学習した技能を定着させるために、学習内容を活用しながら思いや意図をもって創作させる機会を増やす。	A				
	指導力の向上	ICTを活用しながら、より効果的な題材への導入や表現・鑑賞能力を伸ばす方法を研究する。	幅広い活動（音・美・書）を通して、生涯にわたり芸術を愛好する心情を育むとともに、感性を高め心豊かな生活や社会を創造していく態度を養い豊かな情操を培うために、日本及び諸外国の芸術文化の題材をバランス良く取り上げる。	B	B			
			音楽・美術・書道の連携を深め、それぞれの教科における評価方法を共有し、観点別評価に対応できる評価基準を作成する。	B				

英語科	授業	基礎・基本の定着	1年生において、少人数講座や習熟度講座編成を行い、わかる授業・効果的な活動を展開し、生徒の学力向上に努める。	A	【成果】 ・4技能の習得を意識した取り組みを授業の中で積極的に取り入れることができた。特にパフォーマンステストを学期ごとに実施し、発信力の強化を図った。 ・模擬試験やGTECに対する意識向上を図るとともに、小テストや課題を効果的に課して段階的な英語力の伸長に努めた。1・2年生の全員模試で偏差値50以下の層を減らすことができた。 ・定期考査に向けて、課題のある生徒を対象に勉強会を行い、課題克服に向けて取り組ませることができた。 ・2・3年生については、教科書だけでなく多様な教材を用いながら、受験を意識した長文読解演習に努めた。 ・初めての大学入学共通テストに向けて、刻々と変わる情報を生徒に伝えながら演習や対策を練ることができた。 ・ICT機器を積極的に活用し、授業だけでなく日常的な課題配信や大学入試二次対策指導など、さまざまな場面で効果的に活用することができた。 ・共通テスト後の国公立二次対策では、過去問以外にも最近頻出のテーマや今年扱われそうなテーマの問題を用意して、丁寧に個別指導を行った。 【課題】 ・休校期間中、自宅学習習慣を確立しにくい状況があり、学力差に開きが見られた。日常的に、自律した学習者を育てる指導が必要である。 ・授業内での音読練習を控えたため、語学習得の要である音声面の指導が不足した。コロナ禍での指導法を検討し、自宅での音読練習を促す必要がある。 ・1年生理探科のLSEでは、同等の授業が継続的に展開できるよう、教授資料などの情報を英語科内で共有する必要がある。 ・英作文指導では、生徒のコンエラーが減るように正しい語彙や文法を定着させるための演習や指導の工夫が必要である。 ・求められる英語力を養成するために、ルーブリックの見直しと評価規準の作成に取り組む必要がある。 ・論理的思考力や批判的思考力を育成するために効果的な指導法を研究し、他教科の連携も含めて進める必要がある。	
			自立した学習者へと導くために、低学年での丁寧な指導に努める。1年生においては、中学から高校への接続をスムーズに行い、基本事項の定着と家庭学習習慣の確立を図る。2年生においては、小テスト、週末課題を自らの学習サイクルに組み込み、計画的に自学できる学習者へと導く。	A		A
			小テストや定期テストにおける成績不振者に対しては、学級担任とも連携を取りながら、学習に対する意欲の喚起に努める。	A		
	コミュニケーション能力の養成	個人・ペア・グループ・一斉指導といった学習形態を効果的に用いて、アクティブラーニングを推進し、英語を発信する意欲や態度を育む。	A			
		4技能の伸長を重点に置いた指導に努め、幅広く活用されるGTECスピーキングや、難化傾向にある英検2次試験の対策についての研究を進め、指導法を英語科で共有する。	A	A		
	教材研究	指導・評価方法の改善	次年度に予定されている観点別評価の試行に向けて、西高ルーブリックにおける評価基準や評価項目の研究を推進し、評価と指導の一体化を図る。	C		
主体的・対話的で深い学びの推進に向けて、思考力・判断力を高める3年間を見通した指導法の研究を推進する。特に、1年生充実コースおよび2・3年生文系コースの生徒について、自己肯定感を高めて学習に意欲的に取り組めるよう、目指すべき生徒像を教員間で検討・共有して指導にあたる。			A	B		
ローカルサイエンスイングリッシュの研究		1年生理数探究科において、ローカルサイエンスイングリッシュ (LSE) という独自科目を設置し、思考力と英語による発信力の向上を図る。週に1回チームティーチングを行い、クリティカルシンキングを促す教材を用いて、スピーキングやライティングの技術を習得させる。	A	A		
家庭科	知識・理解	基礎的・基本的な知識の適正活用と理解の深化	学習内容をふまえて自分の考えを表現し、同時に、他人の意見を傾聴できるよう支援する。	C	C	【成果】 ・自立に向けて、自分自身や家族の生活を振り返り、生活の場面において、自らが考え、主体的に行動することが重要であることを認識できた。 ・今の自分自身だけでなく、将来を見通し年齢とともに変化するライフスタイルについて理解を深めることができた。 ・実習（調理・裁縫）や課題を通して、知識や技能を習得し、自分自身ができる実感を持つことができた。 【課題】 ・新型コロナウイルス感染症対策のため、幼児とのふれあい体験や、乳幼児の保護者に話を聞く機会等は設定できなかった。また、グループワーク等の機会も持たず、他者の意見から学ぶ学習活動が行えなかった。
	思考・判断・表現	ゆたかな個性の表現	学習活動を通して、自ら課題を見だし、その解決を目指した思考力・判断力を養うよう支援する。	B	B	
	関心・意欲・態度	QOL向上の創意工夫	家庭生活の充実、家族のQOLの向上のために主体的に創意工夫を行う意欲、実践的な態度を育む。	B	B	
	技能	基礎的・基本的技能の向上	実習において、基礎的・基本的技術の習得や上達の実感を持たせる。	A	A	

情報科	授業	情報モラルの向上と情報の適切な処理・活用能力の育成。	コンピュータ室の使用上の注意から徹底し、公共の場であることを意識させ、情報のモラルを実践させる。また、実習等とおして情報処理能力や活用能力を育てる。	A	A	【成果】 ・今年度は、コロナの影響から休校となり、実習の時間が大幅に減少したが、授業展開に工夫を凝らすことにより、当初の目標としていたレベルまでは到達することができた。しかし時間的な余裕がなかったため、生徒が自ら主体的に活用する能力を育成することはできなかったと考える。今年度からスタートした情報解析についてもコロナの影響から理科の実験ができず、理科との横断的な学習ができなかった。 【課題】 ・2024年から実施予定の大学入学共通テスト「情報Ⅰ」について、生徒が受験科目として選択されるように、対応した授業を考えていかなければならない。情報解析については教科の特色となるような理科の実験データを使用して分析、シミュレーションができるように育てたい。資格取得については、1・2年生での早期の取得を目指した取組をしたい。
		生徒の自主的、積極的な情報活用能力の育成	基本的な情報技術を習得させ、情報の意義や役割を正しく理解させ、自ら活用する能力を育成し、分析能力まで発展させる。	B	B	
	その他	校内のICT化の取り組み	今年度のスマートスクール推進事業に向けて教員研修等を実施したい。	B	B	
総合的な学習・探究の時間	探究活動の充実	生徒の主体性を高める取組	生徒一人ひとりの問題意識を出発点とした探究に取り組むことによって、課題と自分との関わりを意識するとともに、社会的視野を身に付ける。	B	B	【成果】 ・地域学習や自由研究などを通じて主体的に課題を見出し、様々な方法で調査・研究してその解決策を提示することができた。また、舞鶴市や中丹広域振興局などの行政組織や、シンクアンドアクトなど企業との連携も行った。 【課題】 ・SDGsに関する学習は、学年によっては十分に行えなかった。今後は地域的な課題としてSDGsを学ばせる必要がある。
		SDGs(持続可能な開発目標)との関連づけの強化	生徒が取り組む課題と国連のSDGs(持続可能な開発目標)を関連づけることで、生徒の取組が次世代に目を向けたものとなるように留意する。	C	B	
	地域社会との連携	地域への興味・関心を促す取組	行政組織・企業など、地域の様々な機関と連携しながら、学校内では学べない様々な社会的な取組や課題などについて広く関心を持ち、社会的貢献をするためにはどのような行動をとるべきかを、自分の進路も意識しながら主体的に考える。	A	A	